



親の思い(我が子の障がいを受け入れた時) 2

(前号の続きです。)

(幼稚園で、他の保護者から幼稚園での〇〇の様子についての質問や加配の事情などを聞かれることがあります……)

このことがきっかけで、全園児の母親宛てに、私の書いた〇〇の生い立ちと、自閉症の記事の新聞、「自閉症とは」という分かりやすい文章を付けて配布してもらいました。あくる日から優しくかかわってきたり、お母さん方も私が面識もないような方まで〇〇の目線で声を掛けてくださるようになりました。親さんから何人も励ましのお手紙をいただきました。「バイバイ」

と声を掛けても、話し掛けても、返事がなくても聞こえている。「〇〇君」と見返りがなくても声を掛けてくれるようになりました。……

知ってもらうことでよい環境をもつことができました。本当はみなさんと同じ小学校に進学したかったけど、勉強の前に、生活や社会のルールを覚える方が先でしたので、迷いなく東濃特別支援学校に入学しました。成長の過程は書き切れません……。〇〇も20歳になりました。聴覚過敏や独特の世界観と、相変わらずのマイワールド君です。**出会った皆さんがどの場面においても、〇〇の良き理解者となり優しさや勇気をくださり、ここまで成長できていると日々感謝しています。**(以下、略)

私が中学部主事するとき(〇〇君は高等部生でしたが)、学校でお会いしたお母さんは、本当に頼りになる方で、PTAの地区の会議のときなども大変お世話になりました。いつも明るく前向きで、堂々としておられたお母さんが、実はこんなにも悩み、苦しんでいらしたということ、この文章で初めて知りました。

この学校に入学してくるまでに、保護者の方々がこの文章のようにいろいろな思いをもって生きてこられたことを、私たち教員は知っていなければならないと思います。我が子の障がいを受け入れ、そしてどのように育てていくかについて悩み、将来についても不安に思いながら、それでも、仲間の保護者の方々や理解者と支え合いながら、入学してこられたことを、私たち教員はしっかりと理解し受け止めなければならないと思っています。そんなことを、若い先生方にも伝えていこうと思っています。

